

弔辞における靈魂への呼びかけの変遷

利 岡 真 帆

1. はじめに

本稿では、明治から現在にかけて公開された公人（政治家、軍人、教育者、文化人等）に対する弔辞を資料として、その特徴を分析する。弔辞は式辞スピーチの一種であるが、他のスピーチとは異なり、その場にはいない相手に対して語り掛ける形式をとるところに特色がある。ただし、その場にはいない相手（故人）に対して語り掛ける弔辞（対故人型の弔辞）は日本では一般的なものであるが、キリスト教圏などでは、会衆に向かって語る弔辞（対会衆型の弔辞）の方が一般的であるとされる（副田 2003）。

本稿で扱う弔辞は、「葬儀などの弔いの式典場面において読み上げられたもの⁽¹⁾」とするが、結果的に収集したものは全て対故人型の弔辞であった。これらの弔辞は主に次の4つの形で公開されている。1. 弔辞の文例集などに実例として掲載されたもの。2. 故人の追悼録に掲載されたもの。3. 故人の所属する機関（学会等）の機関誌等に掲載されたもの。4. 弔辞集などに掲載されたもの。本稿では、こうした公開された資料より収集した1890年代から2000年代にかけての弔辞（770通）を分析の対象とする。

先に述べたように弔辞ではその場にはいない相手（故人）に対して語り掛けるところに特色がある。そのため、弔辞における靈魂への呼びかけに着目し、その変遷をみると表1⁽²⁾で示したように「英霊」「英魂」などが1940年代ごろまでは一定数使用されていたが、1950年代ごろから使用が減少している。特に「英霊」は1930～40年代には40%以上と高い使用率であったにも関わらず、1950年代には8.5%と急激に減少し、1970年代以降には使用を確認することができない。しかし、同じ靈魂であっても「ミタマ⁽³⁾」などは減少せず2000年代でも使用されている。そこで、本稿では弔辞においてある時期まではたくさん使用されていた「英霊」がなぜ減少したのかについて考察する。

表1 弔辞における靈魂の使用

	靈類					魂類			その他	弔辞数
	英靈	～(の)靈	ミタマ	尊靈	尊靈	英魂	～(の)魂	忠魂		
1890	8: 21.1%	22: 57.9%	1: 2.6%			4: 10.5%		9: 23.7%	6: 15.8%	38
1900	1: 4.5%	8: 36.4%	1: 4.5%				1: 4.5%			22
1910	15: 21.4%	17: 24.3%				2: 2.9%		1: 1.4%	1: 1.4%	70
1920	34: 29.1%	33: 28.2%	2: 1.7%	3: 2.6%		7: 6.0%	5: 4.3%		4: 3.4%	117
1930	27: 40.3%	10: 14.9%	7: 10.4%	3: 4.5%		5: 7.5%	4: 6.0%		3: 4.5%	67
1940	21: 42.0%	7: 14.0%		2: 4.0%		5: 10.0%	5: 10.0%	3: 6.0%	1: 2.0%	50
1950	6: 8.5%	14: 19.7%	9: 12.7%	2: 2.8%		1: 1.4%	1: 1.4%		3: 4.2%	71
1960	2: 3.0%	10: 14.9%	9: 13.4%	2: 3.0%						67
1970		1: 1.8%	6: 10.5%							57
1980		2: 2.4%	8: 9.5%	1: 1.2%			1: 1.2%		1: 1.2%	84
1990		2: 2.5%	9: 11.3%				1: 1.3%			80
2000			6: 12.8%	1: 2.1%						47

2. 新聞における「英靈」の使用

「英靈」は『日本国語大辞典 第二版』によると「(3) 死者の靈魂を尊敬するという語。明治以後は戦死者の靈をいうことが多い。」とあり、『岩波国語辞典第7版新版』にも「死者の靈の美称。英魂。現在は多く、戦死者の靈を指して言う。」とあるように、現在では戦死者に対して使用されることが多いようである。ここから推測すると戦時中に「英靈＝戦死者」というイメージができてしまったために戦後「英靈」が使用されなくなったのではないだろうか。実際に、戦後の言論統制の際には、連合軍最高司令部民事検閲局が出した「プレス・コードにもとづく検閲の要領にかんする細則」⁽⁴⁾において「「大東亜戦争」「大東亜共栄圏」「八紘一宇」「英靈」のごとき戦時用語の使用を避けなくてはならぬ」と記されており「英靈」が言論統制の対象となっていた。

そこで実際の使用実態をみるために利岡（2015）では、新聞において「英靈」がどのように使用されているのか朝日新聞社の新聞記事を検索するオンライン記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』（以下『聞蔵』）を用いて調査を行った。

表2より、新聞では日清戦争以降の1895年ごろから主に戦没者⁽⁵⁾に対して「英靈」が使用されており、戦没者以外であってもそれらは皇族や神社の祭神となった人、あるいは赤穂浪士、白虎隊など神格化された人や藩のために戦った人であり、戦没者と同様の属性を持つ者であった。それに対し弔辞ではどうであったのだろうか。表3が弔辞における「英靈」の使用対象者を示したものである。表の右側に収集した弔辞が誰に対する弔辞であったのかを示し、左側に「英靈」を使用した弔辞

表2 『聞蔵』における「英霊」の使用と対象者の分類

	西暦	戦没者	その他	計	注記
日清	1894	0	0	0	
↓	1895	1	0	1	
	1898	1	0	1	
	1900	1	0	1	
日露	1904	1	0	1	
↓	1905	3	0	3	靖国（戦1）
	1906	2	0	2	
	1907	1	0	1	
	1908	1	0	1	
	1909	2	1	3	
	1910	2	0	2	
	1912	0	1	1	
	1913	0	1	1	皇族（そ1）
	1915	1	0	1	
	1916	1	0	1	靖国（戦1）
	1917	4	0	4	
	1919	1	0	1	
	1920	1	7	8	尼港事件（そ5）
	1921	1	2	3	尼港事件（そ1）
	1922	0	2	2	皇族（そ1）
	1926	0	2	2	皇族（そ1）
	1927	0	2	2	皇族（そ2）
	1929	1	1	2	皇族（そ1）
	1930	2	0	2	
	1931	4	0	4	靖国（戦2）
	1932	17	3	20	靖国（戦6）
	1933	13	1	14	靖国（戦9）
	1934	4	2	6	靖国（戦2）
	1935	11	1	12	靖国（戦4）
	1936	7	1	8	靖国（戦4）
日中	1937	83	0	83	靖国（戦14） 訃報欄（戦11）
↓	1938	176	0	176	靖国（戦47） 訃報欄（戦6）
↓	1939	284	2	286	靖国（戦49） 訃報欄（戦35）
↓	1940	137	0	137	靖国（戦25） 訃報欄（戦14）
太平洋	1941	65	1	66	靖国（戦26）
↓	1942	88	2	90	靖国（戦29）
↓	1943	75	3	78	靖国（戦19） 山本元帥（9）
↓	1944	45	0	45	靖国（戦11）
↓	1945	1	0	1	
	1945（戦後）	12	0	12	靖国（1） 生きた英霊（戦3）

注記には、「英霊」が使用されている記事でも特に目立つものを示した。

また、（）内は分類を示しており、「そ」はその他、「戦」は戦没者、数字は当該の記事の数を表す。

（利岡 2015 より）

表3 弔辞における「英霊」の対象者

	「英霊」の使用数			弔辞資料の数		
	戦没者	その他	合計	戦没者	その他	合計
1890年代	8		8	37	1	38
1900年代	1		1	1	21	22
1910年代	6	9	15	7	66	73
1920年代		34	34	1	116	117
1930年代		27	27		68	68
1940年代	12	9	21	13	38	51
1950年代		6	6		71	71
1960年代		2	2		68	68

(利岡 2015 より)

が誰に対する弔辞であったかを示した。

表3をみると、弔辞において「英霊」は戦没者から使用されはじめているが、1910年代ごろより教育者や社長などの戦没者以外にも使用が広がっており、それは戦没者に対する弔辞が読まれなくなった戦後も続いている。つまり、弔辞における「英霊」は「英霊＝戦死者（戦没者）」といった関係だったとは必ずしも言えず、弔辞における「英霊」の減少は戦後の言論統制の影響とは考えにくい。では、なぜ弔辞において「英霊」が使用されなくなったのであろうか。それを考えるためには、まず「英霊」が弔辞においてどのような場所でどのように使用されているかを確認する必要がある。そこで、以下より弔辞における「英霊」の使用についてみていく。

3. 弔辞における「英霊」の使用

770通の弔辞において「英霊」は114通の弔辞（153例）で使用されていた。しかし、同じ「英霊」であっても（1）のように話し相手に直接呼びかけているあるいは言及しているもの（呼称 address term）と（2）のように参列者などに対して説明する際の話題の人物として言及するもの（言及称 reference term）とがある。

- (1) 希くは在天の英霊よ母校の空を天翔りつつ母校の発展を見守り給え。

(1964年 学長心得から学長への弔辞)

- (2) 之れ蓋し社長の英霊を慰むる唯一の道なるべし、謹で白す。

(1929年 社員総代から前社長への弔辞)

これらは同じ「英霊」といっても性質の異なったものであり、「英霊」が使用され

ている 153 例のうち 105 例が呼称で使用されていたことから、本稿では呼称として使用されている「英霊」について調査をおこなう。この呼称の「英霊」は (3)～(7) のような文で使用されていた。

- (3) 昭和十六年六月二十五日恩師佐藤先生ヲ御送りスルニ際シ、謹ミテ英霊ニ申上ゲマス。
(1941 年 教え子から恩師への弔辞)
- (4) 私は茲に聊か感謝の意を英霊に告げ奉りて哀悼の意を表します。
(1924 年 校長から教育評議会委員への弔辞)
- (5) 英霊冀くは安かに瞑せられよ。
(1942 年 鹿児島県知事から戦没者への弔辞)
- (6) 英霊冀くは永く我が盲聾啞教育界の為に御加護あらんことを。
(1938 年 現校長から前校長への弔辞)
- (7) 尚クハ英霊彷彿トシテ来リ饗ケヨ (1917 年 友人から戦没者への弔辞)

これらは、弔辞の冒頭あるいは結びでよくみられる定型的なフレーズであり、その中で「英霊」は使用されていた。まず (3) は「これから弔辞を述べます。」といった開始宣言をするフレーズであり、弔辞の冒頭部分で使用される。次に (4) は「このことばを述べて哀悼の意を表します。」のような宣言をすることによって弔辞の終了を示す終了宣言のフレーズであり、主に弔辞の結びで使用される。(5) は故人の安息を願う、あるいは要求するといった要求・祈りのフレーズであり、主に弔辞の結びで使用される。(6) (7) も (5) と同様に弔辞の結びで主に使用される要求・祈りのフレーズであるが、何を要求あるいは祈るかに違いがある。(6) は自分や残された人を見守るように故人に守護を求めるものであり、(7) は今述べている弔辞のことばを受け取ってほしいと故人に享受を求めるものである。

このように「英霊」は主に弔辞の冒頭と結びで使われることから、本稿ではこれらのフレーズを開始フレーズ (3) と終了フレーズ (4)～(7) とに分類する。

なお、終了フレーズには他にも「〇〇さんのご冥福を願います」のような冥福を祈るものもあるが、この冥福のフレーズでは「英霊」が使用されず、またこの時の人称詞は呼称ではなく言及称であるため、分析の対象外とする。

表 4 は本稿が調査対象とした 770 通の弔辞における「英霊」の使用数と、どのフレーズで使用されているかを示したものである。

表4 弔辞における「英霊」の使用

			呼称	言及称
開始フレーズ	宣言	開始宣言	29	8
	宣言	終了宣言	4	16
終了フレーズ	要求 祈り	安息	13	8
		守護	18	3
		享受	40	0
その他			1	13
小計			105	48
合計			153	

表4を見て分かるように、弔辞における「英霊」という呼称はどこでも使用できるわけではなく、定型的なフレーズの中で使用されていた。このように「英霊」がフレーズ化された文の中で使用されることによって、「英霊」を使ったフレーズ自体がひとつの型となったのではないだろうか。そしてその影響によって1900年代まで戦没者に対してしか使用されなかった「英霊」が戦没者以外に対しても使用できるようになるといった弔辞独自の対象者の広がりをもせたのだと考えられる。

以上のように「英霊」という呼称は開始・終了フレーズと密接に関係しており、このフレーズが何らかの変化を起こしたために「英霊」の使用率が減少したのではないだろうか。そこで、以下より「英霊」が使用されていた開始・終了フレーズがどのように変化したのかについて呼称や文体に着目してみていく。まず4では各フレーズにおいてどのような呼称が使用されているのか、あるいは使用されていないのかなど呼称に着目しその変遷を確認する。続く5では、各フレーズでどのような文体が使用されているのか文体の変遷について確認する。

4. 開始・終了フレーズ

ここでは、「英霊」が使用されていた開始フレーズ（開始宣言）と終了フレーズ（終了宣言・安息・守護・享受）においてどのような呼称が使用されていたのかを年代ごとにみていく。調査は先に述べたように「英霊」が使用されたそれぞれのフレーズに対して行うのだが、これらのフレーズは(8)のように必ずしも1文で1フレーズとなっているわけではなく、また呼称も複数使用されていることがある。

- (8) 社長の英霊並びに瀬口君の御霊よ、どうか私どもの切情をお受け下さつて、永久に安らかにお眠り下さい。

(1952年 従業員代表から社長と社長秘書への弔辞)

(8) は一文の中に「私どもの切情をお受け下さい」のような享受を要求するフレーズと、「安らかにお眠り下さい」のような安息を要求するフレーズが含まれており、調査ではそれらは別々に数えた。また、呼称も「英霊」と「御霊」が使用されているがそれらは別々に数えた。つまり(8)の場合は「享受」(英霊1、ミタマ1)、「安息」(英霊1、ミタマ1)のように数えた。

なお、本稿では「英霊」「霊」「ミタマ」などのように死者にしか使用できないものを「死者の呼称」とし、「先生」「〇〇さん」「貴君」などのように生者にも使用できるものは「生者の呼称」とする。

4-1. 開始宣言

ここでは、開始フレーズの開始宣言における呼称について確認する。開始宣言では以下のような用例がみられた。

- (9) 謹ミテ故大阪市立泉尾工業学校長野田忠蔵先生ノ英霊ニ告グ
(1934年 職員総代から教職者への弔辞／呼称あり(死者・英霊))
- (10) 謹んで日本時計学会名誉会員西村源六郎先生のみたまに申し上げます。
(1986年 会長から名誉会員への弔辞／呼称あり(死者・ミタマ))
- (11) 謹んで元日本時計学会会長 神保泰雄先生にお別れのご挨拶を申し上げます。
(1999年 現会長から元会長への弔辞／呼称あり(生者・名詞))
- (12) 私木戸忠太郎は僭越ながら友人総代として只今君に御別れの辞を申し上げますので御座います。
(1927年 友人総代から教職者への弔辞／呼称あり(生者・代名詞))
- (13) 謹んで窯業協会元会長故江副孫右衛門殿の御霊前に申し上げます。
(1964年 現会長から元会長への弔辞／呼称なし)

ここでは呼称を「死者の呼称」と「生者の呼称」に分類し、さらに「死者の呼称」は使用数が多かった「英霊」「霊」「ミタマ」と「その他⁽⁶⁾」に分類し、「生者の呼称」は名詞と代名詞とに分類した。また、フレーズ内で呼称が使用されていないものは「呼称なし」とした(以下の終了宣言、安息、守護、享受でも同様に分類する)。

開始宣言では(13)のように「御霊前」などが使用されることがあるが、これは

呼称ではなく「死者の霊を祭った場所の前」といった場所を指しているため、「呼称なし」に分類した。また、「〇〇に告ぐ」や「〇〇に申す」「〇〇に捧ぐ」「〇〇に呈す」などの宣言は、直接相手に対して宣言しているのに対し、「〇〇の英霊を弔す」や「〇〇の霊を祭る」は直接相手に宣言しているよりも会衆に対して宣言しており、三人称（言及称）として「英霊」や「霊」が使用されていると判断し、「呼称なし」に分類した。

以上のように開始宣言における呼称を分類し、示したものが表5である。表の実数は開始宣言において当該の呼称を使用した弔辞の数を示しており、百分率は収集した弔辞のうち当該の呼称を使用した弔辞の数の割合を年代ごとに算出したものである。なお、表の「死者の使用数」は必ずしも「英霊」「霊」「ミタマ」「その他」の合計ではない。これは、(8)のように1つのフレーズ内で複数の呼称が使用されることがあるため、「英霊」「ミタマ」ではそれぞれ数えられているが、当該のフレーズの「死者の呼称」を使用している弔辞数としてはまとめられるためである。「生者の使用数」も同様の理由により、必ずしも「名詞」「代名詞」の合計にはならない。(以下表6、7、8も同じ)

表5 開始宣言における呼称の使用

	呼称あり								呼称なし	開始宣言の使用数	弔辞数
	死者				死者の使用数	生者		生者の使用数			
	英霊	霊	ミタマ	その他		名詞	代名詞				
1890	3: 7.9%	4: 10.5%	1: 2.6%	3: 7.9%	11: 28.9%				11: 28.9%	22: 57.9%	38
1900		2: 9.1%	1: 4.5%		3: 13.6%				7: 31.8%	10: 45.5%	22
1910	3: 4.3%	8: 11.4%			11: 15.7%				17: 24.3%	28: 40.0%	70
1920	6: 5.1%	9: 7.7%		3: 2.6%	18: 15.4%	2: 1.7%	1: 0.9%	3: 2.6%	21: 17.9%	42: 35.9%	117
1930	7: 10.4%	3: 4.5%	1: 1.5%	2: 3.0%	13: 19.4%	1: 1.5%		1: 1.5%	16: 23.9%	30: 44.8%	67
1940	9: 18.0%			1: 2.0%	10: 20.0%				16: 32.0%	26: 52.0%	50
1950	1: 1.4%	4: 5.6%	1: 1.4%	3: 4.2%	9: 12.7%	1: 1.4%	1: 1.4%	1: 1.4%	21: 29.6%	31: 43.7%	71
1960		3: 4.5%	3: 4.5%	2: 3.0%	8: 11.9%				18: 26.9%	26: 38.8%	67
1970			2: 3.5%		2: 3.5%				15: 26.3%	17: 29.8%	57
1980		1: 1.2%	5: 6.0%	1: 1.2%	7: 8.3%	1: 1.2%		1: 1.2%	23: 27.4%	31: 36.9%	84
1990		1: 1.3%	3: 3.8%		4: 5.0%	2: 2.5%		2: 2.5%	17: 21.3%	23: 28.8%	80
2000			1: 2.1%		1: 2.1%		1: 2.1%		12: 25.5%	14: 29.8%	47
計	29: 3.8%	35: 4.5%	18: 2.3%	15: 1.9%	97: 12.6%	7: 0.9%	3: 0.4%	9: 1.2%	194: 25.2%	300: 39.0%	770

弔辞全体のうち開始宣言が使用されていたものは300通(39%)あった。これらを年代ごとにみると、1890年代が一番多く、その後ゆるやかに下降し、また1940年代に52%まで上昇したが、再び1950年代ごろからゆるやかに下降している。しかしながら全体的に30%から40%前後とそれほど変化がない。なお、開始宣言を

用しない弔辞は(14)のように冒頭で悲しみを述べ、そのまま故人との思い出や故人の説明などの本文へと移行していくものであった。

- (14) 精機学会元中国四国支部長 田中重芳先生ご逝去の報に接し、まことに哀惜の念に堪えません。

田中先生は、昭和26年に精機学会中国四国支部を創立されてその支部長となり、それ以後昭和41年まで15年間にわたって支部長としての重責を果たしてられました。(1977年 会長から支部長への弔辞)

次に呼称ありと呼称なしとを比較すると、呼称ありは106通(13.8%)であったのに対し呼称なしは194通(25.2%)と呼称なしでの使用が多かった。そして呼称ありのうち死者の呼称と生者の呼称を比較すると、死者の呼称は97通(12.6%)であったのに対し、生者の呼称は9通(1.2%)と非常に少ない。これらより、開始宣言は呼称を使用せずに述べられることが多く、呼称を使用する場合は主に死者の呼称を使用するということが分かった。

では、それぞれを年代ごとにみていくと、まず死者の呼称は、「英霊」が1930年代から40年代にかけて使用が増加しているにも関わらず、1950年代に一気に減少している。それに対し「霊」は「英霊」の使用が増加しはじめた1930年代ごろより徐々に減少している。そして「ミタマ」は1980年代に少し増えているが、全体的に5%前後と少ない数での使用であった。

次に生者の呼称を年代ごとにみると、全体的に使用数が少なく、特に増減はみられない。そして呼称なしをみると、1900年代と1930年代に30%以上使用されているが、全体的に20%前後と安定して使用されている。

以上より、開始宣言では生者の呼称、呼称なしはどの年代もあまり増減はみられないのに対し、死者の呼称の特に「英霊」が1940年代から50年代にかけて一気に減少しているということが分かる。

4-2. 終了宣言

ここでは、終了宣言における呼称について確認する。終了宣言では以下のような用例がみられた。

(34)

(15) 茲ニ謹ミテ英靈ニ告ク

(1910年 大学総長から教職者への弔辞／呼称あり(死者・英靈))

(16) 敢て微衷を披歴して先生の靈に告く

(1901年 慶應義塾出身代表から福沢諭吉への弔辞／呼称あり(死者・靈))

(17) では、先生、これでお別れ申しあげます。

(1955年 後輩から先輩への弔辞／呼称あり(生者・名詞))

(18) 我今此処ニ立ツテ君ニ誄詞ヲ述ヘントスレハ万感胸ニ滿チテ復言ヲ知ラス
(1919年 学校長から教職者への弔辞／呼称あり(生者・代名詞))

(19) 茲に祭壇を設け君の英靈を祀る

(1942年 市長から少佐への弔辞／呼称なし)

終了宣言でも開始宣言と同様に「告ぐ」「申す」「述べる」などが主に使用されており、「○○の靈を祭(祀)る」などは呼称ではなく言及称として扱い、呼称なしに分類した。表6では終了宣言の使用と呼称の有無について示した。

表6 終了宣言における呼称の使用

	呼称あり								呼称なし	終了宣言の使用数	弔辞数
	死者				死者の使用数	生者		生者の使用数			
	英靈	靈	ミタマ	その他		名詞	代名詞				
1890		2:5.3%			2:5.3%				14:36.8%	16:42.1%	38
1900		1:4.5%			1:4.5%				10:45.5%	11:50.0%	22
1910	1:1.4%	1:1.4%			2:2.9%		1:1.4%	1:1.4%	54:77.1%	57:81.4%	70
1920	3:2.6%	1:0.9%	1:0.9%	2:1.7%	7:6.0%				71:60.7%	78:66.7%	117
1930									42:62.7%	42:62.7%	67
1940				1:2.0%	1:2.0%				30:60.0%	31:62.0%	50
1950		1:1.4%	1:1.4%		2:2.8%	1:1.4%		1:1.4%	40:56.3%	43:60.6%	71
1960									31:46.3%	31:46.3%	67
1970			1:1.8%		1:1.8%				19:33.3%	20:35.1%	57
1980							1:1.2%	1:1.2%	26:31.0%	27:32.1%	84
1990			1:1.3%		1:1.3%				34:42.5%	35:43.8%	80
2000									12:25.5%	12:25.5%	47
計	4:0.5%	6:0.8%	4:0.5%	3:0.4%	17:2.2%	2:0.3%	1:0.1%	3:0.4%	383:49.7%	403:52.3%	770

弔辞全体のうち、終了宣言は403通(52.3%)と約半数の弔辞が終了宣言を使用していた。しかし、これらを年代ごとにみると、たしかに1900年代から1950年代までは50%以上使用されているが、1960年代ごろよりゆるやかに減少しはじめ2000年代には25.5%にまで減少していた。

次に、呼称ありと呼称なしとを比較すると、呼称ありは20通(2.6%)と少ない

のに対し、呼称なしは 383 通 (49.7%) と非常に多く。終了宣言では主に呼称を使用せずに述べられているということが分かる。

次に年代ごとにみていくと、終了宣言は呼称の使用が非常に少ないためこれだけではあまり分からないが、開始宣言の表 5 と併せてみると、死者の呼称の「英霊」が 1950 年以降に使用されないのに対して「ミタマ」が 1950 年以降も使用されているといったことなど共通の傾向を示していることが分かる。

以上より、終了宣言ではそのほとんどが呼称を使用せずに述べられており、1960 年代ごろから使用数が減少しているということが分かる。これは、終了宣言のフレーズを使用するといったひとつの型の使用が減少しているとも考えられる。

4-3. 安息

ここでは、安息における呼称について確認する。安息では以下のような用例がみられた。

- (20) 君が在天の霊よ、希くは安らけく眠れ
(1929 年 友人への弔辞／呼称あり (死者・霊))
- (21) 畏友・佐々木良作君の御霊よ安らかに眠り下さい
(2000 年 中曽根元首相から友人への弔辞／呼称あり (死者・ミタマ))
- (22) 先生亦瞑スヘシ
(1915 年 教え子から恩師への弔辞／呼称あり (生者・名詞))
- (23) 君亦以て冥すべきであります
(1951 年 上司から部下への弔辞／呼称あり (生者・代名詞))
- (24) ご指導ありがとうございました。どうか安らかに眠りください。
(2009 年 教え子から恩師への弔辞／呼称なし)

(20) ~ (24) のように安息では「安らかに眠れ」や「瞑すべき」などが主に使用されていた。表 7 では安息の使用と呼称の有無について示した。

弔辞全体のうち、安息は 248 通 (32.2%) で使用されていた。年代ごとにみると、1980 年代と 2000 年代は 40% 以上と少し多いが、全体的に 30% 前後で使用されておりあまり増減はみられない。

次に、呼称ありと呼称なしとで比較すると、呼称ありは 162 通 (21%) であったのに対し、呼称なしは 86 通 (11.2%) と呼称ありでの使用が多いことが分かる。呼

表7 安息における呼称の使用

	呼称あり										呼称なし	安息の 使用数	用 辞 数
	死者				死者の 使用数	生者		生者の 使用数					
	英霊	霊	ミタマ	その他		名詞	代名詞						
1890	1:2.6%	2:5.3%		1:2.6%	4:10.5%	1: 2.6%	6:15.8%	7:18.4%	1: 2.6%	12:31.6%	38		
1900						4:18.2%	1: 4.5%	5:22.7%		5:22.7%	22		
1910	1:1.4%				1: 1.4%	5: 7.1%	9:12.9%	14:20.0%	1: 1.4%	16:22.9%	70		
1920	3:2.6%	2:1.7%			5: 4.3%	5: 4.3%	15:12.8%	20:17.1%	7: 6.0%	32:27.4%	117		
1930	5:7.5%	1:1.5%	2:3.0%		8:11.9%	3: 4.5%	10:14.9%	13:19.4%	3: 4.5%	24:35.8%	67		
1940	3:6.0%	1:2.0%			4: 8.0%	2: 4.0%	9:18.0%	11:22.0%	4: 8.0%	19:38.0%	50		
1950	1:1.4%	2:2.8%	3:4.2%		5: 7.0%	3: 4.2%	2: 2.8%	5: 7.0%	8:11.3%	18:25.4%	71		
1960		1:1.5%	1:1.5%		2: 3.0%	10:14.9%		10:14.9%	8:11.9%	20:29.9%	67		
1970						6:10.5%		6:10.5%	7:12.3%	13:22.8%	57		
1980			1:1.2%		1: 1.2%	18:21.4%		18:21.4%	16:19.0%	35:41.7%	84		
1990			1:1.3%		1: 1.3%	13:16.3%		13:16.3%	14:17.5%	28:35.0%	80		
2000			2:4.3%	1:2.1%	2: 4.3%	7:14.9%		7:14.9%	17:36.2%	26:55.3%	47		
計	14:1.8%	9:1.2%	10:1.3%	2:0.3%	33: 4.3%	77:10.0%	52: 6.8%	129:16.8%	86:11.2%	248:32.2%	770		

称ありの中でも死者と生者の呼称とで比較すると、死者の呼称は33通（4.3%）だが、生者の呼称は129通（16.8%）であった。これらより、安息は呼称ありの特に生者の呼称を使用して述べられることが多いということが分かった。

では、これらを年代ごとにみていくと死者の呼称は1930年代ごろに増加し1960年代ごろから減少している。これは死者の呼称の中の「英霊」が1930年代に増加し、1950年代に一気に減少しそれ以降使用されなくなったことが影響していると考えられる。次に生者の呼称についてみていく。生者の呼称全体は1950年代だけ使用が減少しているが、それ以外は15～20%前後で使用されており、あまり増減はみられない。しかし、「名詞」と「代名詞」とで比較すると、「代名詞」が1950年代に一気に減少し、1960年代以降は使用されなくなったのに対し、「名詞」は「代名詞」が使用されなくなった1960年代から一気に増加している。呼称なしは1940年代までは10%以下であったが、1950年代ごろより徐々に増加し、2000年代には36.2%まで使用されるようになっている。

以上より、安息は1950年代ごろに「英霊」や「代名詞」が減少し、1960年代ごろから「名詞」や呼称なしが増加していた。

4-4. 守護

ここでは、守護における呼称について確認する。守護では以下のような用例がみられた。

- (25) 何卒在天の英霊とこしえに本協会の発展を御守り下さいます様御願ひいたしてやみません。

(1964年 現会長から元会長への弔辞／呼称あり(死者・英霊))

- (26) 願はくば先生の霊しばらく留まられて我等が盟邦同信の友と決戦下文学の振起を図るを見守り給はんことを。

(1943年 徳富猪一郎から島崎藤村への弔辞／呼称あり(死者・霊))

- (27) 先生、これからもお浄土から、私たちを温かく見守り続けてください。

(2009年 教え子から恩師への弔辞／呼称あり(生者・名詞))

- (28) 君又以て暝し皇国の前局を照護し給はむことを

(1942年 関係性不明／呼称あり(生者・代名詞))

- (29) どうぞ、いつまでも、遠い空のかなたより、私たちを見守ってください。

(1989年 北島三郎から美空ひばりへの弔辞／呼称なし)

(25)～(29)のように守護では「見守る」や「昭監」「照護」などが主に使用されていた。表8では守護の使用と呼称の有無について示した。

表8 守護における呼称の使用

	呼称あり								呼称なし	守護の使用数	弔辞数
	死者				死者の使用数	生者		生者の使用数			
	英霊	霊	ミタマ	その他		名詞	代名詞				
1890	1: 2.6%				1: 2.6%				2: 5.3%	3: 7.9%	38
1900									1: 4.5%	1: 4.5%	22
1910	3: 4.3%	3: 4.3%			6: 8.6%					6: 8.6%	70
1920	3: 2.6%	3: 2.6%		1: 0.9%	7: 6.0%				1: 0.9%	8: 6.8%	117
1930	4: 6.0%		1: 1.5%	2: 3.0%	7: 10.4%		1: 1.5%	1: 1.5%	4: 6.0%	12: 17.9%	67
1940	5: 10.0%	1: 2.0%		1: 2.0%	7: 14.0%		1: 2.0%	1: 2.0%	1: 2.0%	9: 18.0%	50
1950						1: 1.4%		1: 1.4%	9: 12.7%	10: 14.1%	71
1960	2: 3.0%		1: 1.5%		3: 4.5%				1: 1.5%	4: 6.0%	67
1970			1: 1.8%		1: 1.8%	2: 3.5%		2: 3.5%	2: 3.5%	5: 8.8%	57
1980			1: 1.2%		1: 1.2%	3: 3.6%		3: 3.6%	9: 10.7%	13: 15.5%	84
1990						5: 6.3%		5: 6.3%	7: 8.8%	12: 15.0%	80
2000						6: 12.8%		6: 12.8%	8: 17.0%	14: 29.8%	47
計	18: 2.3%	7: 0.9%	4: 0.5%	4: 0.5%	33: 4.3%	17: 2.2%	2: 0.3%	19: 2.5%	45: 5.8%	97: 12.6%	770

弔辞全体のうち、守護は97通(12.6%)とあまり使用されていない。しかし、年代ごとにみると、全体的には10%以下の使用であるが、1930年代から50年代には10%以上に増加し、1980年代から2000年代にも10%以上に増加していた。

次に、呼称ありと呼称なしとで比較すると、呼称ありは52通(6.8%)、呼称なし

は45通(5.8%)とあまり差がない。

では、これらを年代ごとに比較すると、まず死者の呼称は1930年代から40年代に10%以上に増加したがその後減少し、1990年代以降使用されていない。それに対し生者の呼称は1920年代までは全く使用されておらず、1930年代から使用されはじめ、1970年代ごろより徐々に増加している。

以上より、守護は弔辞全体で見るとあまり使用されておらず、呼称の有無にあまり差がみられないことが分かった。また、死者の呼称が1950年以降減少したのに対し生者の呼称が1970年代以降増加しているといった呼称の入れ替わりをみることができた。

4-5. 享受

ここでは、享受における呼称について確認する。享受では以下のような用例がみられた。

(30) 冀クハ英霊来り饗ケヨ (1940年 関係性不明／呼称あり(死者・英霊))

(31) 庶幾くは在天の霊我等が誠を享げられんことを

(1970年 理事長から教職員への弔辞／呼称あり(死者・霊))

(32) 氏ヤ霊アラバ来り饗ケヨ

(1984年 愛知県南設楽郡長から戦没者への弔辞／呼称あり(生者・名詞))

(33) 君其れ来りて享けよ

(1928年 陸軍歩兵少佐から通訳官への弔辞／呼称あり(生者・代名詞))

(34) これを以て御別れの辞とします。どうか御享け下さい。

(1927年 研究所所長代理から研究者への弔辞／呼称なし)

(30)～(34)のように享受では「饗けよ」「享けよ」あるいは用例にはないが「受けよ」など表記に違いはあるが「うけよ」という形が使用されていた。表9では享受の使用と呼称の有無について示した。

表9 享受における呼称の使用

	呼称あり											呼称なし	享受の 使用数	引 辞 数	
	死者				死者の 使用数	生者		生者の 使用数							
	英霊	霊	ミタマ	その他		名詞	代名詞								
1890	4:10.5%	7:18.4%		6:15.8%	17:44.7%	1:2.6%	1:2.6%	2:5.3%	9:23.7%	28:73.7%	38				
1900		1:4.5%		2:9.1%	3:13.6%				5:22.7%	8:36.4%	22				
1910	6:8.6%	4:5.7%			10:14.3%		1:1.4%	1:1.4%	11:15.7%	22:31.4%	70				
1920	11:9.4%	8:6.8%		8:6.8%	27:23.1%		1:0.9%	1:0.9%	11:9.4%	39:33.3%	117				
1930	8:11.9%	3:4.5%	1:1.5%	7:10.4%	19:28.4%		1:1.5%	1:1.5%	8:11.9%	28:41.8%	67				
1940	7:14.0%	1:2.0%		3:6.0%	11:22.0%				7:14.0%	18:36.0%	50				
1950	3:4.2%	4:5.6%	1:1.4%	1:1.4%	8:11.3%				3:4.2%	11:15.5%	71				
1960		1:1.5%			1:1.5%	2:3.0%		2:3.0%		3:4.5%	67				
1970		1:1.8%			1:1.8%				1:1.8%	2:3.5%	57				
1980											84				
1990											80				
2000											47				
計	39:5.1%	30:3.9%	2:0.3%	27:3.5%	97:12.6%	3:0.4%	4:0.5%	7:0.9%	55:7.1%	159:20.6%	770				

引辞全体のうち、享受は159通（20.6%）で使用されていた。しかし、年代ごと
にみると、1940年代ごろまでは30%前後の使用率があったにも関わらず1950年代
に一気に減少し、1980年代からはその使用を確認することができない。

次に呼称の有無で比較すると、呼称ありは104通（13.5%）であったのに対し呼
称なしは55通（7.1%）と呼称ありでの使用の方が多い。また、死者と生者の呼称
で比較すると、死者の呼称が97通（12.6%）であるのに対し生者の呼称は7通（0.9
%）と非常に少ない。これらより、享受は主に呼称ありの特に死者の呼称で使用さ
れていることが分かる。

これらを年代ごとに見ると、まず死者の呼称は1920年代ごろから増加したにも関
わらず1950年代ごろから減少し、1980年代以降使用されなくなっている。これは
「英霊」が1910年代から1940年代にかけて増加したが、1950年代に一気に減少し
たことが影響していると考えられる。次に呼称なしをみると、1930年代までは10%
前後使用されていたが、1950年代以降は5%以下に減少している。

以上のことより、享受は死者の呼称や呼称なしなど全体的に1950年代ごろに減少
していることが分かった。

4-6. まとめ

ここでは、開始宣言、終了宣言、安息、守護、享受に分けてそのフレーズの使用
数や呼称の有無およびその変遷について確認してきた。その結果これらはある年代
ごろから使用に変化がみられた。

開始宣言では生者の呼称、呼称なしはどの年代もあまり増減はみられないのに対

し、死者の呼称の特に「英霊」が1940年代から50年代にかけて減少していた。終了宣言では、そのほとんどが呼称を使用せずに述べられており、1960年代ごろから使用数が減少していた。安息では1950年代ごろに「英霊」や「代名詞」が減少し、1960年代ごろから「名詞」や呼称なしが増加していた。守護では死者の呼称が1950年以降減少したのに対し生者の呼称が1970年代以降増加しているといった呼称の入れ替わりが起っていた。享受では、死者の呼称や呼称なしなど全体的に1950年代ごろに減少していた。

以上のように1950年代あるいは60年代ごろから呼称あるいはフレーズが減少していた。これには、弔辞の文体変化が関係していると考え、以下より弔辞における文体についてみていく。

5. 開始・終了フレーズにおける文体変化

ここでは弔辞における文体変化についてみていく。文体の認定は文末などで行われることが多いが、開始・終了フレーズは必ずしも1フレーズで1文になる訳ではなく、複数のフレーズを並べて1文をつくることもある。そのため本稿では述語末によって文体の認定を行った。以下にいくつか例を挙げる。

- (35) 英霊冀クハ微衷ヲ掬ミ給ヒ／天上ノ憩永久ニ安カラシコトヲ。

〔文語〕(享受／安息)(1940年 関係性不明)

- (36) あなたのお人柄を敬慕して、永遠のお別れに集りましたことを、天翔りお受けなさいまして、／心安らかにお眠り下さいませよう、念じてお別れのことばといたします。

〔口語〕(享受／安息)(1975年 学会代表から研究者への弔辞)

- (37) 願クバ君ガ霊久ヘニ吾人ト共ニ比島ノ天地ニ止リ邦人前途ノ幸福ヲ護レ

〔文語〕(守護)(1927年 関係性不明)

- (38) いつまでも、僕達を見守っていて下さい。

〔口語〕(守護)(2005年 岸谷五郎から本田美奈子への弔辞)

- (39) 謹みて 故陸軍々少佐景山博文君の英霊に告ぐ

〔文語〕(開始宣言)(1942年 警察署長から軍医少佐への弔辞)

- (40) 今日葬式に臨みて謹んでこの弔辞を呈します。

〔口語〕(終了宣言)(1912年 校長代理から教職員への弔辞)

このように「です」「ます」あるいは「ください」などを使ったものを口語体とし、「である」や命令形、終止形、「給う」や「～んことを」などを使ったものを文語体とした。表10は各フレーズの文体を年代ごとに示したものである。実数は該当の文体を使用した弔辞数であり、百分率は各年代の使用数のうち、該当の文体を使用した割合を示したものである。また、口語体と文語体の割合を比較した際に割合の高い方に網掛けをした。

表10 開始・終了フレーズにおける文体の変遷

	開始宣言			終了宣言			安息			守護			享受		
	文語体	口語体	計	文語体	口語体	計	文語体	口語体	計	文語体	口語体	計	文語体	口語体	計
1890	22:100.0%		22	16:100.0%		16	12:100.0%		12	3:100.0%		3	28:100.0%		28
1900	9:90.0%	1:10.0%	10	11:100.0%		11	5:100.0%		5	1:100.0%		1	8:100.0%		8
1910	26:92.9%	2:7.1%	28	54:94.7%	3:5.3%	57	16:100.0%		16	6:100.0%		6	22:100.0%		22
1920	35:83.3%	7:16.7%	42	71:91.0%	7:9.0%	78	32:100.0%		32	7:87.5%	1:12.5%	8	38:97.4%	1:2.6%	39
1930	24:80.0%	6:20.0%	30	38:90.5%	4:9.5%	42	19:79.2%	5:20.8%	24	10:83.3%	2:16.7%	12	26:92.9%	2:7.1%	28
1940	22:84.6%	4:15.4%	26	28:90.3%	3:9.7%	31	17:89.5%	2:10.5%	19	7:77.8%	2:22.2%	9	17:94.4%	1:5.6%	18
1950	2:6.5%	29:93.5%	31	3:7.0%	40:93.0%	43	6:33.3%	12:66.7%	18	2:20.0%	8:80.0%	10	8:72.7%	3:27.3%	11
1960	1:3.8%	25:96.2%	26		31:100.0%	31	4:20.0%	16:80.0%	20	3:75.0%	1:25.0%	4	2:66.7%	1:33.3%	3
1970		17:100.0%	17	1:5.0%	19:95.0%	20		13:100.0%	13		5:100.0%	5	1:50.0%	1:50.0%	2
1980	1:3.2%	30:96.8%	31		27:100.0%	27	2:5.7%	33:94.3%	35	1:7.7%	12:92.3%	13			
1990		23:100.0%	23	1:2.9%	34:97.1%	35		28:100.0%	28		12:100.0%	12			
2000		14:100.0%	14		12:100.0%	12	1:3.8%	25:96.2%	26		14:100.0%	14			

表10をみると、開始宣言、終了宣言、安息は1940年代までは文語体の方が多く、1950年代から口語体へと移っている。守護は1960年代だけ文語体の方が多いという違いはあるが、開始宣言などと同様に1950年代から口語体での使用が増加している。しかしながら享受だけは1950年代以降も文語体で多く使用されている。もちろん、享受においても1940年代までは10%以下であったものが1950年代には27.3%へと増加している。このように他のフレーズと同様に文体の変化の影響を受けているにも関わらず、享受のフレーズだけは依然として文語体での使用が多い。ここから、享受のフレーズは他のフレーズと違い文語体で享受のフレーズを述べるのがひとつの型となっており、口語体にし難かったのではないかと推察される。以下にその例を挙げる。

- (41) 此の上は貴下の遺された先達の精神を仰ぎ、貴下の見えざる御指導を冀つて、私共微力ではございますが、斯界に尽すところあらんと欲し、貴下の御偉業に應える所存であります。冀くは在天の靈来り享けよ。謹んで哀悼の意を表し弔辞と致します。 (1961年 会長から前会長への弔辞)

この(41)の甲辞は全体的に口語体で書かれているにも関わらず、波線部分の享受のフレーズのみ文語体で書かれている。このように享受のフレーズだけ口語体に上手く切り替えられなかったため、他のフレーズが口語体へと切り替わった1950年代ごろより享受のフレーズの使用が減少したのだと考えられる。そして、「英霊」はこの享受のフレーズで最もよく使用されており、この享受のフレーズが文体変化の波に乗れず減少した影響によって「英霊」は使用されなくなったのではないだろうか。

また、4でみてきたようにこの文体が変化する1950年代ごろより終了宣言などのフレーズが使用されなくなるなどの現象や、生者の呼称の代名詞が使用されなくなるなどのさまざまな現象に対しても影響を与えたと考えられる。

6. まとめ

本稿では甲辞において「英霊」がなぜ減少したのかについてみてきた。その結果、甲辞における「英霊」はそのほとんどが冒頭や結びで使用されるフレーズ内で使用されており、このフレーズとの密接な関係にあるということが分かった。また、甲辞は40年代から50年代にかけて文語体から口語体へと変化しており、この文体変化の影響が生者の呼称や死者の呼称、またフレーズに影響を与えていた。そしてこの影響は「英霊」に対して顕著に現れており、開始宣言などにおける「英霊」の呼称の減少だけでなく、「英霊」が最もよく使用されていた享受のフレーズ自体が文体変化の波に乗ることができず減少し、このことも「英霊」が減少した大きな原因であると考えられる。

つまり、甲辞における「英霊」の減少は甲辞における文体の変化によって引き起こされたのである。

注

- (1) 甲辞と名のつくものには雑誌などに投稿された読まれていないものもあるが、本稿では扱わない。
- (2) 表の実数は甲辞の数を示しており、百分率は収集した甲辞のうち当該のことばを使用した甲辞の数の割合を年代ごとに算出したものである。その他には「明霊」「精霊」「神霊」「精魂」「魂神」「幽魂」「芳魂」「魂魄」が含まれる。
- (3) ミタマの表記には「御霊」「御魂」「み霊」「みたま」などさまざまあったため、本稿では「ミタマ」と表記する。

- (4) 日高六郎編 (1970)「皿検閲とプレス・コード違反」『戦後資料マスコミ』日本評論社より。
- (5) 戦死者とは戦争によって亡くなった軍人を指し、戦没者とは軍人だけでなく戦争によって亡くなった民間人も含む。新聞記事では軍人と民間人を区別せずに記されていることがあったため、ここでは戦没者とした。
- (6) 「尊霊」「忠魂」「英魂」「魂魄」「精霊」など。

参考文献

- 副田義也 (2003)『死者に語る — 弔辞の社会学』ちくま新書
- 利岡真帆 (2015)「『英霊』の語誌 — 「英華秀霊」から「戦死者」へ —」(関西大学国文学会 発表原稿)
- 日高六郎編 (1970)「皿検閲とプレス・コード違反」『戦後資料マスコミ』日本評論社
- 小学館国語辞典編集部編 (200-02)『日本国語大辞典第二版』小学館
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 (2011)『岩波国語辞典第7版新版』岩波書店

例文出典一覧

- (1) 灘吉虎夫 (1963)「告別の辞」『九州歯科学會雑誌 17-1・2』九州歯科学会
- (2) 井上与三郎 (1953)「前社長守谷吾平告別式に於ける社員總代弔辞」『創業滿五十年を顧みて』守谷正毅
- (3) 瀬谷勇 (1940)「建築學科學生總代弔辞三年生」『早稲田建築学報第 18 号故佐藤功一先生追悼特輯號』早苗会
- (4) 吉武栄之進 (1924)「誠意を罩めた無數の弔辞」『偉人和田豊治翁』三木作次郎
- (5) 薄田美朝 (1942)「薄田鹿兒島縣知事の弔辞」『軍神横山少佐』鹿兒島県教育会
- (6) 橋本綱太郎 (1938)「弔辞 東京聾啞學校長 橋本綱太郎」『盲啞教育の師父小西信八先生小伝と追憶』日本聾啞教育会
- (7) 坂井為吉 (1917)「枝原坂井兩少佐の弔辞」『忠勇列伝地中海及北海戦死者之部』忠勇顕彰会
- (8) 安永渡平 (1952)「靈前に捧げられた弔辞十一人集」『經濟時代 17-5』經濟時代社
- (9) 久田喜一 (1934)「野田校長先生を偲びて」『あ、野田先生 追悼誌』大阪市立

泉尾工業学校校友会

- (10) 神保泰雄 (1986) 「弔辞」『日本時計学会誌 117』日本時計学会
- (11) 板生清 (1999) 「弔辞」『マイクロメカトロニクス 43-4』日本時計学会
- (12) 木戸忠太郎 (1927) 「故比企忠博士追悼之記」『水曜会誌 5-6』京都大学工学部水曜会
- (13) 山内俊吉 (1964) 「弔辞」『窯業協會誌 72-827』日本セラミックス協会
- (14) 奥島啓式 (1977) 「弔辞」『精密機械 43-512』精機学会
- (15) 濱尾新 (1910) 「雑報 故梅博士ノ葬儀ト濱尾大學總長ノ弔辞」『法学協會雑誌 28-10』東京大学大学院法学政治学研究科
- (16) 田中清一 (1901) 「吊詞吊文」『福澤先生哀悼録』みすず書房
- (17) 佐伯梅友 (1955) 「弔辞」『奈良学芸大学学报 NO23』奈良学芸大学
- (18) 筒井八百珠 (1919) 「雑報」『岡山醫學會雜誌 Vol.31』岡山医学会
- (19) 久米威夫 (1942) 「弔辞・祭文・弔歌」『軍神横山少佐』鹿児島県教育会
- (20) 松宮春一郎 (1930) 「弔詞・世界文庫刊行會主」『追悼録』牧祥之助
- (21) 中曾根康弘 (2011) 「多情仏心は政治家の常」『弔辞劇的な人生を送る言葉』文藝春秋
- (22) 矢吹浩 (1915) 「雑報」『岡山醫學會雜誌 27』岡山医学会
- (23) 長野実 (1951) 「弔辞」『旭の友 3-56』長野県警察本部警務部教養課
- (24) 平井信之 (2010) 「弔辞」『エコノミア 61-1』横浜国立大学
- (25) 山内俊吉 (1964) 「弔辞」『窯業協會誌 72-827』社団法人日本セラミックス協会
- (26) 徳富猪一郎 (1986) 「弔辞」『「弔辞」集成鎮魂の賦』青銅社
- (27) 池上良正 (2009) 「弔辞」『東北宗教学 5』東北大学大学院文学研究科宗教学研究室
- (28) 大槻正雄 (1944) 「弔辞」『故陸軍軍医少佐景山博文追悼録』尾沢朝一郎
- (29) 北島三郎 (1995) 「美空ひばり様」『弔辞死者を送ることば』日本テレビ
- (30) 不明 (1942) 「弔辞抄」『鈴木与平氏伝』清水市教育会
- (31) 颯川徳助 (1970) 「弔辞」『園田学園女子大学論文集 5』園田学園女子大学
- (32) 宇佐美治香 (1985) 「弔辞」『弔辞集』故福田定松葬儀事務所
- (33) 佐藤英敦 (1928) 「祭文と弔辞」『山崎羔三郎君伝』山口村在郷軍人分会
- (34) 桐原稔見 (1928) 「大原社會問題研究所で執行された故高田慎吾氏の葬儀に於ける弔辞の二三」『児童問題研究』同人社書店

- (35) 不明 (1942) 「弔辞抄」『鈴木与平氏伝』清水市教育会
- (36) 井狩正司 (1977) 「弔辞」『花あれば 角川源義追悼録』角川文化振興財団
- (37) 井上直太郎 (1927) 「弔辞」『比律賓群島と太田恭三郎君』川瀬俊継
- (38) 岸谷五郎 (2011) 「頑張れ、頑張れって言ってごめんね」『弔辞劇的な人生を送る言葉』文藝春秋
- (39) 岩谷芳松 (1944) 「弔辞」『故陸軍軍医少佐景山博文追悼録』尾沢朝一郎
- (40) 後藤牧太 (1913) 「終焉の記」『元良博士と現代の心理学』弘道館
- (41) 大野政吉 (1961) 「弔辞」『窯業協會誌 69-781』日本セラミックス協会

(としおか まほ／本学大学院生)